

～入澤彩先生を偲んで～

「入澤彩先生との思い出」

大分大学医学部神経生理学教室

西丸 直子

入澤彩先生（旧姓船石、生理学女性研究者の会会員）は平成21年3月3日に89歳で逝去されました。先生は大正8年11月11日福岡県のお生まれです。子供時代を岡山の井原で過ごされ、岡山県立井原高等女学校を卒業されました。小さい頃から唱歌が御上手で、女学校時代には先生についてドイツリートを勉強され、周囲の方々は声楽家になられるのではと思っていたようです。しかし、昭和13年に東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）に入学されました。昭和17年に東京女子医学専門学校を卒業され、卒業と同時に同校の生理学教室に入られました。その間もドイツリートの勉強を続けておられたそうです。晩年広島で再び、ドイツリートの練習を再開されました。平成14年ごろ白内障や変形性脊椎症を発症され、傍目につらそうので、周囲のものが「唱はそろそろお止めになられては・・・」と申し上げた時、「私は一度やろうと決めたことはやめない性格です」と言われたということです。昨年のクリスマスにも、力強い声で唱われたとお聞きしました。私は先生のすばらしいお声をお聞きする機会がなかったことを残念に思います。声楽の先生は、とにかく頭のさがるほどの勉強家でしたと回想されています。すばらしい才能とともに大変な勉強家で、努力家であったことがうかがえます。

昭和27年2月に入澤宏先生と結婚され、広島に初めて来られた時には、広島医科大学の教室の人々はその洗練された美しさと頭のよさに驚いたとのことでした。呉市阿賀町という田舎町に一羽の白鳥が舞い降りたようだったと教室の方が回想されています。私は小学校高学年から高校まで油絵を描いていたのですが、キャンバスは買えなくてベニヤ板に描いていました。そんな時、入澤先生ご夫妻からたくさんのキャンバスと画集をいただいたことがありました。子供心に、あまり絵と関係のなさそうな先生なのにと不思議に思ったこ

とをよく覚えています。後日、彩先生のお父様がたいへん著名な画家であったとうかがい、なるほどと思ったものです。彩先生の音楽における才能や美的感覚のすばらしさは、お父上のDNAなのだと納得したりしています。

結婚されたあと、キューリー夫妻のように、お二人で自転車を連ねて研究室に通うのを夢見ておられたと聞きました。現実には、まだまだ古い考えが根強かった広島では、陰口をたたかれたりで実現しなかったようです。昭和35年に入澤宏先生が教授になられた後も、「名より実をとる」との考えの下に、助手に甘んじておられたように思います。このころ、機能と構造を同時に考えようとのアイデアから、広島大学の解剖学の教授であった、新進気鋭の浜清教授のもとで電頭をはじめられました。その後20年間は、助手と言う立場に甘んじられながら、すばらしい仕事をされた時期だったと思います。毎日、広島大学医学部の門の前にあった「国天」という家庭料理を出してくれる小さなお店のカウンターで、お二人で楽しそうに夕食をしておられました。時々、私たち大学院生もご一緒したものです。実験に使ったあとの、心臓のない牡蠣やシャコを持ち込んで料理してもらったのも楽しい思い出です。夕食後は研究室に帰られ遅くまで実験をしておられました。そのような環境の中で、後世に残る立派な研究をされたことに感銘を受けます。彩先生は、単に縁の下の力持ちではなく、しっかりとご自分の意志と考えを持っておられ、決して曲げられなかったことが強く印象に残っています。私の大学院時代に、彩先生から「今は、女性研究者はごくわずかの方を除いて、実力にあった地位を得ることも、やりたい研究をすることも、まだまだできません。貴方の時代はもっと良くなると思いますよ」と言われたのが印象に残っています。このような思いから、最後まで生理学女性研究者の会を支援くださったのだと思います。また、彩先生はお料理がお上手で教室の皆を呼んでくださり、手作りの美味しいお料理をいただいたことを思い出します。

晩年は広島市医師会付属の看護学校で生理学の講義を続けられ、生理学会には必ず出席されました。いくつになっても好奇心を失わないということを教えられ

たように思います。彩先生が願っておられた、女性研究者が研究しやすい社会的環境がととのい、正当な評価を受けられるよう念じつつ、謹んでご冥福をお祈りいたしたいと思います。

(日本生理学会誌71巻9号に入澤彩先生の追悼文を書かせていただきましたので、少し違った面から記しました。)



～入澤彩先生を偲んで～

「彩先生の思い出」

福島県立医科大学・医学部・薬理学講座

木村 純子

彩先生が亡くなられたとき、広島は紅梅が咲いていました。簡素ながら美しく飾られた葬儀場に、夫の入沢宏先生を亡くした後の彩先生をずっとお世話してこられた二宮石雄先生ご夫妻と瀬山一正先生、それに広島時代のお弟子さんたちが集まっておられました。平成3年に亡くなる時「彩を頼む」と宏先生から言い残された二宮先生は、以来、奥様とご一緒に「彩先生が思うとおりに」をモットーに彩先生を支えてこられたのです。白内障、脊椎骨の圧迫骨折、大腿骨頭骨折など少なくとも3回入院生活がありましたが、そのたびに最善策がとられ手厚い看護と介護が行われました。退院後は毎日ヘルパーさんが彩先生の自宅を訪れ、最晩年には週一度の医師の往診も行われました。彩先生はご希望どおりの生活を全うされたのでした。

1984年に私が岡崎の生理学研究所で入沢研に加わったとき、研究室は入沢宏教授と野間昭典助教授を中心に、全国から若い研究者が集まり、パッチクランプ法による心筋の膜電流に関する新知見がどんどん出て活気にあふれていました。専業主婦(とばかり私たち新参者は思っていました)の彩先生は、毎朝たくさんお菓子が入った袋を両手に下げてラボに現れ、宏先生の原稿を手直しされたり、セミナーがあると一番後の席でいつも熱心に聞いたりしておられました。土曜日の午後になると、閑散としたラボで宏先生がワープロ

を打っていたあい間に、運転免許取立ての私は彩先生を誘って軽自動車で大きなケーキが食べられる喫茶店に行ったものです。彩先生はいつも満面の笑顔で「木村さんは・・・が上手ね」などと何でも褒めて下さりご馳走して下さいました。

彩先生は、研究者としてのご自分のお話はなさいませんでした。岡山県の井原での少女時代の楽しかったこと、宏先生と留学された米国での愉快的思い出、それに宏先生のユーモラスな失敗談をまるで我が事のように好んでお話になりました。宏先生と御一緒のときは、共通の笑い話を披露しながらお二人で声をたてて笑っておられたものです。宏先生の著書「先生と私」に「パークロフト(博士)とその夫人との家庭生活を花束のように飾っていた笑い声は二人を最も完全な伴侶とした」というA.V. Hillの文が引用されていますが、それは彩先生と宏先生のことでもあったと思います。最近、彩先生の研究業績など詳しい経歴を始めて知る機会があり、彩先生が立派な研究者であったことを認識しました。ご自身をいつも宏先生の一步後に置く姿勢は強く感じてはいたものの、彩先生の心の奥にしまわれたお気持ちに思いをはせることが私にはできなかった、としみじみ思います。

最後に、彩先生がいつもWPJに強い関心を持っておられたこと、昨年、日本生理学会とWPJのために多額の寄付をして下さったことを記し、WPJを代表して心から感謝いたしますとともに、彩先生のご冥福をお祈りいたします。

～入澤彩先生を偲んで～

「入澤彩先生を偲んで」

九州大学大学院 薬学研究院 病態生理学分野

野田 百美

「彩先生へ

やっとご主人と再会できますね。入院されたときに、一度しかお見舞いに行けずにごめんなさい。ゆっくりお休みください。そして、私たちをいつまでも見守っていてください。」

平成 21 年 3 月 5 日、入沢彩先生がお亡くなりになったというメールを出張先の台湾で拝見しました。とても残念でした。しかも、葬儀にかけつけることもできず、とても悔しい思いをしました。

3 年前の 5 月に広島県の病院に一度お訪ねしたときは、とてもお元気そうでした。それ以前には生理学会でお会いした記憶が二度くらいでしょうか・・・思えば、私は彩先生とお会いした回数はそれ程多くないのです。しかし、彩先生とは最初にニューヨークのロックフェラー大学に入沢宏先生と来られた際に初めてお目にかかり（1989 年でしょうか・・・）、それ以来、彩先生は私にとって精神的に最も影響を与えた女性の一人として、とても大事な存在でした。

当時、留学中の私は、帰国しても行くところがなく、夫は息子を連れて帰ってしまっていたし、どうしたものかと悶々としていました。彩先生は静かに私の話を聞いて、穏やかな口調で、どこどこの××先生の奥様も研究や勉強を続けていらっしゃる、という話をしてくださり、職や身分に関係なく、続けることが大事、というようなことをおっしゃいました。随分と励まされた気がしました。彩先生のように、陰に日向にご主人を支える、というようなことは私にはできませんでしたが、彩先生のお蔭で、職にも就けず子育てで忙しかった間、希望を持っていられたと思うのです。



写真は、最初にお会いしたときのものです。入沢夫妻と、当時、私を指導してくださっていたギャツビー先生（Prof. David C. Gadsby）、夫がお世話になった浅沼教授です。うしろにクイーンズボロ・ブリッジが見えます。もう 20 年前のはずなのに、3 年前にお目にかかったときと殆ど同じように思えます。

彩先生は年賀状の返事を必ずくださり、会ったこともない私の子供たちや犬のことまで気遣ってくださり、お見舞いに行った後も、すぐに葉書をくださいました。とても気配りが細やかで、気品があり、今でも私が最も尊敬する日本女性のお一人です。

彩先生のような女性生理学者がおられたこと、これだけで、「女性生理学者の会」の誇りだと思います。優しく、気丈で、そして、きっとかわいい女性だったと思います。入沢先生があんなにシアワセそうだったのはきっと彩先生のような奥様がおられたからだろうと思うのです。

ほんの短い会話で、あれほど影響力のある女性を私は他に知りません。彩先生が私を導いてくださったように、私も将来の展望に悩んでいる若い女性生理学者のために、微力ながら尽力させていただこうと改めて思う次第です。

最後にこの場を借りて御礼を申し上げます。

彩先生、どうもありがとうございました。



生理学女性研究者の会（WPJ）

「NEWSLETTER 第 28 号」

2009 年 7 月発行 より抜粋